

二 岩門合戦

少弐経資と 霜月騒動の直後、少弐経資の弟三郎左衛門尉景資が、筑前国那珂郡の岩門城いわと（筑紫郡那珂川景資の合戦 町）に挙兵して、惣領経資に攻められ滅亡した。

『歴代鎮西志』は

弘安八年乙酉、太宰豊前守盛氏少弐盛氏 三郎左衛門尉 始名 岩門城に居り、蒙古合戦の功を募り、（まんなちやく）寡嫡の意あり、兵を構え城を修す。都督府司、管内の武士を遣し、岩門を征す。城主死を致す。
（原文は漢文）

と、少弐景資が元寇での功績を嵩かさにきて惣領の座を奪おうとして挙兵し滅んだと説明している。

このころ、全国的に惣領と庶子の対立が目立っているから、景資と惣領経資との対立があったことは十分考えられることである。しかし、安達泰盛の子二郎盛宗との関係で誅ちゅうされたという見方が近來提出された。

『武藤系図』の景資伝に「城殿一所二岩門城に於て腹切」とあり、『筑紫系図』にも「岩門城に於て、惣領に対し反逆、城氏同じく討死」とあり、城盛宗が岩門城で、少弐景資と一緒に戦死したとなっている。

安達盛宗は父泰盛の肥後守護代として下向し、蒙古合戦では、肥後国の御家人を指揮して活躍したありさまは、竹崎季長の『蒙古襲来絵詞』で有名である。二度の合戦で盛宗と景資は親しくなっていたらしい。

景資が晩年に盛氏を称したのは安達泰盛の一字を頂戴ちやうたいしたものと考えられる。



経資の花押

第2章 鎌倉時代の豊前国

権勢家泰盛に接近して、その權威を高
にきて惣領をないがしろにするような
言動が目立っていたのであろう。彼が
尊敬する泰盛が失脚して、肥後守護代
の座を失った盛宗が景資を頼って、博
多郊外の岩門城へ逃げ込んだのをかく
まっつて、兄経資の指揮する近国の兵に
攻められ、安達盛宗と運命をともしし
たものと考えられる。

少弐景資は豊前守の受領名を称して
いる。景資の父資能も豊前守を称した
時期があった。父資能は蒙古合戦のこ
ろまで豊前守護であったから、景資は
受領として、豊前国衙を掌握し、同時
に守護代として豊前国で暮らしたこと
があったのではなからうか。

第2表 蒙古合戦と岩門合戦の勲功地 (豊前国関係)

新 恩 地	新 地 頭	旧 地 頭	出 典
上毛郡原井村・阿久封村	薩摩前司入道尊覚(宇都宮通房)		比志島文書
安吉・吉久・久光三ヶ所(宇佐郡カ)	江見民部六郎景忠	兵庫次郎兵衛尉(高並経範カ)	〃
佐野次郎丸 (宇佐郡)	曾根崎淡路法橋慶増	兵庫馬二郎兵衛入道(高並経範)	〃
東浜田地 (下毛郡得永名)	宇良金崎次郎入道々眼	同 上	〃
時紀名	田中七郎入道善光	同 上	〃
阿弥陀寺大通新開	相神浦次郎入道妙蓮	同 上	〃
神実扶院仏性田	同 上	同 上	〃
豊前国佐野次郎丸	白石六郎左衛門尉通武	兵庫三郎入道(高並能範カ)	〃
下毛郡全得名	丹浪房良晴	兵庫馬三郎能範	宮成文書
佐田庄 (宇佐郡)	前薩摩守法師尊覚	足立五郎左衛門尉遠氏	佐田文書
青木別荘符田戸数(下毛郡青・青木別荘カ)	倉上弥藤次兵衛入道	數千入道正行(野中二郎入道正行カ)	比志島文書
仲津郡下長江村5町余	大河左近入道子息行長		大川文書
田河郡金田村	隠岐三郎左衛門入道行存(二階堂)		太宰府関係史料10
筑前国小山田村	薩摩前司入道尊覚	金田六郎左衛門尉時通	比志島文書
筑前国那珂東郷岩門十分一	相神兵衛六郎家弘	同 上	〃
同 上	(以下9人)	同 上	〃
薩摩国鹿兒島郡司職十分一	野中左衛門三郎宗通法師		〃
肥前国神崎庄一分	山田中内右衛門尉政盛		太宰府関係史料10
同 上	小犬丸弥次郎入道祐西		〃
同 上 2町9反等	大和三郎兵衛太郎入道浄覚		〃
肥前国松浦庄内甘木村	白石美野又次郎通繼	兵庫馬三郎能範	比志島文書
同 上 石垣村	土々呂木又六家直	同 上	〃
同 上 加々良島	松浦次郎延	兵庫馬二郎	〃
老岐国瀬戸浦預所職	薩摩太郎左衛門尉盛房		〃

合戦の余波と 第2表に見えるように、豊前国関係の武士が、景資に従って、その所領を没収されている。

豊前国武士

兵庫馬二郎・馬三郎の兄弟や金田六郎左衛門尉などがそれで、寛千入道正行もそれかもし

れない。寛千は桢中の誤読ではあるまいか。霜月騒動の前、野仲二郎入道正行と兵庫馬二郎経範は、野仲郷内冠師野村、河江原寺居垣、中津河岩木一町などをめぐって裁判し、和与している文書（『梶野文書』）が最近発見された。それによると、兵庫馬二郎は資時となっている。経範は景資の被官となって、景資の一字をいただき改名したのではなからうか。

兵庫氏は『到津文書』によると、宇佐郡司藤原氏の庶子で、宇佐郡院内の高並に居住して高並氏を称し、少武氏二代目資能の被官となって、豊前か肥前の守護代を務めていたことが、次の史料で判明する。

守護代兵庫大夫資範非法の間の事、鎮西の守護成敗の事においては、右大將家の御時より、別儀をもつて定め置かるの間、代々の御下文を帶し、沙汰を致す所なり。余国の守護沙汰に准じ申さるべからざる事なり、但し、細々非法の由の事、尋ね下され、左右を申さるべきの由、群議に及ぶと云々（『吾妻

鏡』寛元二年＝二二四四＝八月二十四日）

この意味は、鎮西の守護は源頼朝時代から、他地域の守護よりも幅広い権限が与えられているが、守護代が度々非法をなすという訴えがあるので調査して報告させることにしたというものである。

高並氏の系図を他の史料などから作成すると、下の



ようになる。

次に、岩門合戦で少弐経資と共に攻撃側に加わって勲功の賞に与った武士に、薩摩太郎左衛門尉盛房がいる。『宇都宮紀井系図』では、薩摩守通房の子に、太郎左衛門盛房、二郎左衛門経房があり、経房は出家して教蓮と号し、弘安五年（二二八二）四月、肥前国長嶋庄上村の地頭浦公村と同庄檜崎村を争っている。この村も蒙古勲功の地であろうか。

また、正応三年（二二九〇）の『宇都宮文書』に次の史料がある。

早く前薩摩守法師法名をして、豊前国佐田庄地頭職足立五郎左衛門尉遠氏知行分を領知せしむべき事

右、同国安雲村の替りとして宛行わる所なりてへれば、早く先例を守り領掌せしむべきの状、仰せにより、下知件の如し

正応三年十月四日

（準時）
陸奥守平朝臣（花押）

（執直時）
相模守平朝臣（花押）

（原文は漢文）

宇佐郡佐田庄（安心院町）へは、応永六年（二三九九）、宇都宮一族の者が城井菅迫から移り住んで佐田氏を称し、大内氏の被官となつて、宇佐郡代を務めることになる。前地頭足立五郎左衛門尉遠氏は、安達泰盛方に加担して没落した武蔵国の武士と思われる。宇都宮通房が勲功賞として得ていた上毛郡阿久封村は安雲村のことであろう（第2表参照）。